

ひと・ネットワーク 130

「神奈川県内の社会福祉士現況調査から見えるもの—専門性の向上に資するために—」

(社)神奈川県社会福祉士会
副会長 西原留美子



「社会福祉士及び介護福祉士法」制定から17年、国家試験も第15回を数えました。この間、社会福祉士試験合格者は全国で49,517名、うち神奈川県内の合格者は3,338名と発表されています(試験センター調べ)。

昨年度、神奈川県内の社会福祉士1,569名を対象に調査を行い、630名から回答を得ました。その属性は20代、30代が多く、平均37.9歳、女性が3分の2でした。8割が社会福祉関連機関に所属し、相談員等ソーシャルワークを担う職に従事している人が約5割でした。

社会福祉士として何らかの不安を感じている人が9割以上を占め、不安の要因には「資格を生かせない」「情報についていけない」「スーパービジョンが受けられない」の3因子があることがわかりました。「資格を生かせない」は現場職に、「情報についていけない」は高齢者施設以外の現場職に、「スーパービジョンが受けられない」は福祉系大学で受験資格を取得した若年層の相談職に多いことがわかりました。会が行う研修については、参加意思はあるものの、日程の都合がつかず受けられない人が多いことが推察されました。受験資格取得ルートや職場、職種に対応した現任研修の体系化が急務と考えます。

また、専門職団体として、成年後見活動などの社会貢献活動を行うことには肯定的意見が多数でしたが、個人としては「時間的余裕がない」「知識技術が伴わない」などの理由で消極的な回答が多く見られました。

一方、福祉系大学や養成施設の学生が行う現場実習では、社会福祉士が専門性をどのように伝えるのが問われていることもわかりました。後進の育成も大きな課題です。

会では調査結果をふまえ、研修の体系化と相談事業等のあり方について検討を始めました。社会福祉士がソーシャルワーカーとして力を発揮するために、資格を得た者一人ひとりがいかにその力を高められるか、バックアップする専門職団体の責任が問われています。

と吉田さんは言います。
「生きていくためには必要不可欠な『食』ですが、その一方で、当たり前な事柄として捉えられてしまい、重きがおかれないうことが往々にしてあります。こどもの森では、幼稚園や保育園での食育実践に向け、指導者の方々に素材の見分け方や食環境作りの工夫などの研修を行っています。最初は皆さん、その必要性があるのかと戸惑っている様子が見えましたが、しかし実践の中で、子どもたちが食材料に触ったりして、五感を使いながら何かを感じ少しずつ変わっていく姿を見てうちに、『食育』が『食』だけではなく、子どもたちの生きる力を育む一つの手段で

あることに指導者の方々が気付く、次第に意欲的に取り組んでくれるのです。今、子どもたちの育つ環境が大きく変わってきています。また、最近では、大人の生活習慣病とされてきた様々な病気が、子どもたちの体を蝕んでいるといった深刻な問題も浮かび上がってきています。望ましい食生活を営むことのできる能力を高められる環境を、周囲の大人たちが整え、そして育ちを温かく見守ってあげることが大切なのです」と結んでくださいました。

◆NPO法人こどもの森
0538-3611311
URL <http://www.kodomono-mori.net>

「食育とは子どもの育ちだけでなく、活動を通じて、手間暇をかけて子どもを育てることの大切さを伝えていくこと」と吉田さん。「手間隙」とは、便利なもの全てを捨ててしまおうとか、豪華なものを用意するというのではなく、シンプルでもいいからきちんとした物を与えてあげることであり、時間や汚れを気にせず『食』を作る過程に参加させてあげること、そして強制したり制止することなく、子どもたちの発見や喜びの声に耳を傾け、応えてあげることなども話されていました。

価値観や生活形態を常に満たし向上させようと、快適さや便利さ、早さなどを優先した生活を求めるようになりました。また今後、社会の人口構成や就業構造の変化が進むことで、これまで家族が分業して行ってきた掃除や洗濯、食事、子育て等の家内作業は益々産業化され、多様なサービス供給主体が生まれてくることは必至です。

豊かな時代を迎えようとしている中、「食」の問題だけでなく、生きていくために必要な生活の様々な事柄を、子どもたちにどのように伝えていくか。また、成功体験から生まれる満足感を豊かな人間形成にどう生かしていくかが、今後の子育て支援の課題のように感じられました。(企画課)

4月の視点



「食育とは子どもの育ちだけでなく、活動を通じて、手間暇をかけて子どもを育てることの大切さを伝えていくこと」と吉田さん。「手間隙」とは、便利なもの全てを捨ててしまおうとか、豪華なものを用意するというのではなく、シンプルでもいいからきちんとした物を与えてあげることであり、時間や汚れを気にせず『食』を作る過程に参加させてあげること、そして強制したり制止することなく、子どもたちの発見や喜びの声に耳を傾け、応えてあげることなども話されていました。

価値観や生活形態を常に満たし向上させようと、快適さや便利さ、早さなどを優先した生活を求めるようになりました。また今後、社会の人口構成や就業構造の変化が進むことで、これまで家族が分業して行ってきた掃除や洗濯、食事、子育て等の家内作業は益々産業化され、多様なサービス供給主体が生まれてくることは必至です。

豊かな時代を迎えようとしている中、「食」の問題だけでなく、生きていくために必要な生活の様々な事柄を、子どもたちにどのように伝えていくか。また、成功体験から生まれる満足感を豊かな人間形成にどう生かしていくかが、今後の子育て支援の課題のように感じられました。(企画課)